

自然居士

シテ 自然居士
子方 少年
ワキ 人商人
ワキ連 同輩の人商人
間狂言 雲居寺辺の男

ワキ／これは東国方の人商人にて候。我このほどは都に候ひて、幼きものを一人買ひ取つて候が、片時の暇と申シテ今朝よりまかり出で、未だ帰らず候。東山 雲居寺に自然居士の説法の由、申し候。もしもしさやうの所へ行きてや候らん、まかり出で尋ねばやと存じ候。

シテ／雲居寺造営の居士が説法。今日結願と触れてあるか。すぐに時刻になりしかば、導師 高座に上り、発願の鐘打鳴らし、慎み敬つてもおす一代教主釈迦牟尼宝号、三世の諸仏十法の薩埵に申してもおさく、総神分に般若心経、敬つてもおす受くる、諷誦の事、三宝衆僧の御布施一裏、右志 は二親精靈頓證菩提のため、身の代衣一襲、三宝に供養し奉る。あら面目や身の代衣と書いたるよな。彼の西天の貧女が一衣を僧に供養せしも、身の後の世の逆善。今の作善は親の

為。身の代衣恨めしき、身の代衣恨めしき。浮世の中を疾く出でて、先考先妣諸共に、同じうたてに生まれんと読み上げ給ふ自然居士 墨染の袖を濡せば、数の聴衆も色々の袖を濡さぬ人は無し。袖を濡さぬ人は無し。

シテ／居士はきつと推量する子細の候、今の諷誦に身の代衣と書いたるは。あつぱれこの人は身を売りたる人にてあるべし。しからば今の暴けなき男は、人商人なるべし。さてこれは何方へ行かうぞ。いやいや汝行きたらばすでに喧嘩に及ぶべし。居士大津松本とかやへ行き、この小袖を返し、今の幼き者をこうて見ようぞ。げに説法が無にならざるよな。さりながら説法は善悪を知らしめんが為なり。今の幼き者は善人商人は悪人すは、善悪の二道ここにつきたり。今日の説法これまでなり。願似此功德普及於一切我等興衆生皆共成。仏道修行のためなれば、身を捨人を助くべし。

ワキ／今出でて、そこともいさや白浪の、この舟路をや急ぐらん。

シテ／舟を得たりと説く法の、路に迷はぬ心かな。

シテ／なうなう其のお舟へ申さり。

ワキ／これは山田矢走の渡船にてもなし。渡りの舟の御用ならばよそを御尋ね候へ。

シテ／我も旅人に非ざれば、渡りの舟とは申さばこそ其のお舟へ物申さう。

ワキ／さて此の舟をば何舟と知し召されて候ぞ。

シテ／其の人買舟の事さうよ。

ワキ／ああ音高し、何と何と。

シテ／音高しとは道理道理。其の舟の漕ぐ權の事さうよ。

ワキツレ／艫は唐艫といふこそあれ。ひとかいといふ權は無きに。

シテ／水の煙の霞をば、一霞、二霞、一汐二汐などといへば。今漕ぎ初むる舟なれば、一權舟とは僻事か。

ワキ／げに面白くも述べられたり。さてさて何の御用やらん。

シテ／これは自然居士といへる説教者なるが、説法の場をさまされつる、恨申しに参りたり。

ワキツレ／説法とは道理をのべ給う、我らに僻事無きものを。

シテ／僻事とは申さばこそ、とにかくに、もとの小袖は参らせつ、舟に離れて叶はじと、藻裾を波に浸しつつ、舷に取り附き引き止むる。

シテ／あら腹立ちや、さりながら。法衣に恐れて得は打たず、これも汝が科ぞとて、艫權を以てしきりに打つ。

シテ／打たれて声の出でざるは、もし空しくやなりぬらん。

ワキ／何しに空しくなるべきぞと。

シテ／引き立て見れば。

シテ／見るは繩。口はわたの轡をはめ、泣けども声の出でばこそ。

シテ／あらいとほしの者や、やがて連れて帰らうずるぞ心安う思ひ候へ。

ワキ／これは舟路の門出にて候に、なにとて聊爾なる事をば承り候ぞ。

シテ／先に申す如く、これは自然居士といへる説教者なるが、説法を破り、これまで参りて候。

この幼き者を賜り候へ。親類の方へ返したう候。かへい

ワキ／居士のこれまで御出にて候程に、参らせたくは候へども、我等が中に堅き大法の候。

シテ／その御法は候。

ワキ／かやうに人を買ひ取つて再びもとの手へ返さぬ法にて候。

シテ／御法の上はとかう申すに及ばず。又我等が中にも堅き大法の候。

ワキ／その御法は候。

シテ／かやうに身を捨人を助ける来つて助け得ねば、大衣を掛けたる身の不祥にて承り、本寺へ帰らぬ大法にて候程に力無き事、お下り候奥陸奥の国とかやへは下るとも、この舟を下るる事は候まじ。

ワキ／まことさやうに承らば拷訴を致さう。

シテ／拷訴とは

ワキ／命を取らう

シテ／もとより捨身の行しつともお反るまじ命を召され候へ。

ワキ／とにかくにこの自然居士にはつたともてあつかうて候。散々になぶつて帰し候べし。いかに居士舟より御上り候へ。

シテ／いやいや聊爾は下りまじく候。

ワキ／何の聊爾の候べきまづ御上り候へ。

シテ／船頭殿の御顔の色こそ直つて候へ。

ワキ／いやちつとも直らず候。又これなる舟子の申し候は、居士は舞の上手の由、申し候間、舞を舞うて御見せ候へ。

シテ／居士はかたの如く、説教をこそすれ、舞舞うたる事はなく候。いで説教を説いて聞かせ申

そう。

ワキ／あら聞きたうもなの説教や候。折節これに田舎土産の烏帽子えぼしの候。これを召して一さし御舞うまひ候へ。居士は舞舞うたる事は無き由、仰せ候へども、一段と烏帽子が似合にあひ申して候。

シテ／面々はあまりにつれなうわたり候。
ワキ／何のつれなう候べき。

シテ／いやつれないぞとよ。志賀辛崎かひしきの一つ松。つれなき人の心かな。

ワキ／余りに舞が短うて見足らず候はいかに。

シテ／この序ついでに舟のめでたき事を語つて聞かせ申し候べし。ここにまた蚩尤しいうといへる逆臣げきしんあり。かれを亡さんとし給ふに鳥江おとえといふ海を隔てて攻めべきやうも無かりしに。黄帝くわおていの臣下に貨狄かてきといへる士卒しそあり。或時、貨狄庭上の池の面を見渡せば折節秋の末なるに、寒き嵐に散る柳の一葉いちえつに浮みしに、また蜘蛛くもといふ蟲むし、これも虚空におちけるが其の一葉ひとばの上に乗りつつ次第次第にさがにのいと儂はかなくも柳の葉を吹き来る風に誘はれ、汀に寄りし秋霧あきぎりの立来る蜘蛛くもの振舞ふるまひ、げにもと思ひ初めしより、たくみて舟を造れり。黄帝くわおていこれに召されて、鳥江おとえを漕ぎ渡りて蚩尤しいうを易く亡ぼし、御代おんじよを治め給ふ事一萬。パ千歳とかや。

シテ／然ればふねの船せんの字を、公きみにに舟すねと書きたり。さて又天子の御舸おんがを龍舸りよおがと名づけ奉り、舟を一葉いちえつといふ事この御宇ごよより生まれり、又君の御座船ござふねを龍頭鷓首りよおづげきしよと申すもこの御代より起れり。
ワキ／我が舟を龍頭鷓首りよおづげきしよと御祝ごぞくひ祝著しうじやく申して候。とても事に觥ごうを摺すつて御見せ候へ。

シテ／さらば觥ごうを賜はり候へ。

ワキ／船中の事にて候程に觥ごうは持たず候。

シテ／それも苦しからず候。また觥ごうの起りをも語つて聞かせ申し候べし。彼の仏の難行苦行し給ひしも。一切の衆生しゆじやうを助けんためなり。居士も亦この人故、身を捨て骨を砕くべし。それ觥ごうの起りを尋ぬるに、東山にある僧の扇の上に木の葉の散りしを数珠ずしゆにて扱あつかひし音よりも、觥ごうといふ事、始まりたり。居士も亦其の如く、觥ごうの子は、百人の数珠ずしゆ。觥ごうの竹は扇の骨。おつ取りかへしこれを摺する。所は志賀の浦なれば、さざなみやさざなみや志賀辛崎かひしきの、松の上葉うわばをさらりさらりと觥ごうの真似まねを数珠ずしゆにてすれば、觥ごうより猶手なほをも摺するもの今は助けてたび給へ。

ワキ／とても事に鞆鼓かづこを打つて御見せ候へ。

シテ／このちはふつつとなぶられ申すまじく候。

ワキ／此上は案内無しに連れて御帰り候へ。本もとより鼓は波の音。本より鼓は波の音。寄せては岸をどうどは打ち、雨雲迷ふ鳴神なるがみのとどろとどろと鳴る時は、降り来る雨ははらはらはらと小笹の竹の觥ごうを摺すり、狂言ながらも法の道のち、今は菩提の岸に寄せ来る舟の中より、ていとうど打連れて、共に都みやこに上りけり共に都みやこに上りけり。